第4節　商品の物神的性格とその秘密

〔David　Harvey〕前節の味気ない文体とは対象的である。文学的スタイルで書かれている。これは第4節が、『資本論』初版時においては付録の位置にあったが、第二版の決定版になって現在の位置へと移動していることによる。

〔浜林正夫〕物神的性格：ものがみ。独立の生命を与えられ、神に祭り上げあれた**物**である。成田不動産のお守りは紙、布、木片からできている物であるが、人間は単なる物以上のもの、スーパーマンのような超能力をもつと考える。交通事故から免れる。お守りは物神である。物神は、魔力をもっていて、現世的なご利益を与える。

商品世界では、もともと人間の労働生産物である商品や貨幣が、逆に人間を支配する力として現れる。マルクスはこの関係を、人間の頭脳の産物である「神」や「仏」が人間を支配する力として現れる宗教的世界と対比して「物神崇拝」「物神的性格」と呼んだ。

商品経済の根底にあるのは、人間同士の関係である。この社会は、高度に発達した社会的分業の社会。すなわちそれぞれの生産者が特殊な使用価値をもった商品をつくっている。その生産は自立した生産者が独立の私的労働として行っているもので、商品交換を通じて需要・供給を調節している社会である。つまり、根底には私的生産者同士の関係がある。ところが、商品経済の社会では、根底にある人間同士の関係が、経済の表面では人間関係としては現れず、すべて商品と商品の関係、つまり物と物との関係として現れる。

〔不破哲三〕人間社会の歴史には、奴隷制社会、封建制社会、資本主義社会と人間が人間を搾取するさまざまな社会が登場する。その中で「搾取」という事実が目に見える形で現れないのは資本主義社会だけである。この事実を明るみに出すには、マルクスが開拓した科学的経済学が必要だった。

商品経済の社会では、人間と人間の関係が、社会の表面では、すべて物（商品）と物（商品）との関係として現れる。だから、人間による人間の搾取という根本問題も労働力の売買、言い換えれば〝労働力商品〟と〝賃金〟との交換、つまり物と物との関係として現れる。社会の根本問題が、物と物との関係の背後に隠れてしまうのである。

奴隷制社会や封建制社会など、以前の社会形態では目に見える形で現れていた搾取するものとされる者の社会関係が、霧の中に姿を消してしまう。マルクスは、この逆立ち現象を宗教的世界との対比で捉え、〝物神崇拝〟という言葉を選んだ。

（『資本論』探究　全三部を歴史的に読む）

物神性の分析は2段階を通じて進行する。**その①、**資本主義の不可避的な側面として、物紳性がどう発生し、どう作用するかの考察。

（p.128）「商品は、一見、自明な、平凡な者らしく見える」「（商品は）形而上学的なつべこべと神学的なしかめつらさに満ちた非常にやっかいな代物である」

（p.128）「（テーブルが商品として登場するやいなや）それは感性的でありながら超感性的な物に転化する）」

感性的：テーブルは目で見れば木だとわかる。超感性的：テーブルは「売る対象」になると、「触ったり」「使ったり」する以上の物になる。「いくらで売れるか」は市場に出さないとわからない。

（p.129）「脚で「床に立つ」「頭で立ち」「踊りだす」

「床に立つ」：テーブルの使用価値そのもの。

「（他のすべての商品にたいして）頭で立ち」：商品になったとたん他のものと交換されるようになる。

「踊りだす」：テーブルは市場でお金に交換され、世の中をまわる。踊りだす。

（p.129）「商品の神秘的性格は、商品の使用価値からは生じない。それはまた、価値規定の内容からも生じない」

　「使用価値からは生じない」：労働が異なっていても、どれも人間の諸機能の支出であり、使用価値という人間の欲望を満足させる性質に神秘性はない。

「価値交換の内容からも生じない」：価値交換の基礎は支出される労働の量または時間ある。具体的有用労働に神秘性はない。

（p.130）（商品の謎的性格、以下、小見出しは浜林）「では、労働生産物が商品形態をとるやいなや生じる労働生産物の謎的性格は、どこから来るのか？」「明らかに、この形態そのものからである」

（p.130）人間労働の同等性は労働生産物の同等な価値対象性と物的形態を受け取り、その継続時間よる人間的労働力の支出の測定は労働生産物の価値の大きさいう形態を受け取り

労働の生産物は労働生産物という性質＝価値対象性もっている。この労働生産物の価値は、はかることができる。

「対象化」：〔浜林〕は「対象化」を「自分の外に存在するものになった」と解し、「物質化」を「物になった」とする。私のもっている労働力で缶コーヒーの缶をつくった場合に、対象化されたと表現している」と用例をあげている。「ある使用価値または財が価値をもつのは、そのうちに抽象的人間労働が対象化または物質化されているからにほかならない」（「第1節　商品の二つの要因」p.72）

（p.130）‥最後に生産者たちの労働のあの社会的規定がその中で発現する彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係いう形態を受け取る。

社会的関係のなかで、あいだに貨幣が入るが交換されるいう形をとるということ。

（p.130）（労働の社会的性格）したがって商品形態の神秘性は、単に次のことである。すなわち、商品形態は、人間にたいして、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、‥

（p.130）したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に存在する諸対象の社会的関係として反映させるということにある。

「単に次の点にある」：商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格（動的性格）として反映させ、これらものの社会的属性（一定社会の中で必然的に生まれる属性）として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係（交換関係）として反映させるということである。

「労働の社会的性格」：1人ひとりが物をつくることは私事である。しかし、その物が社会全体として必要とされる点では社会的性格をもつ。個々人は意識していなくても、より集まって社会を支えているのだから、その意味で労働は社会的性格をもっている。生産物に現れているのは、人々の社会的な関係がその中に現れるということ。すなわち、人間と人間の関係が物と物との関係となって現れてくるということがポイントである。

（p.130）この〝入れ替わり〟によって、労働生産物は商品に、すなわち、感性的でありながら超感性的物、または社会的なのになる。

p.128に前述。

（p.131）物が見えるのはなぜか。物は視神経にたいして光が印象を与えるが、その場合、外にある物、この物と自分の目との関係で見える。労働生産物の場合には、物と物との関係のなかに人間と人間の関係が隠されている。労働生産物の商品形態およびこの形態を表す労働生産物の価値関係は、労働生産物の物質的性格およびそれから生じる物的諸関係とはなんのかかわりもない。

（p.131）（人と人との関係が物と物との関係として現れる）ここで人間にとって物と物との関係という幻影的関係をとるのは、人間そのものの特定の社会的関係にほかならない。だから類例を見いだすために、われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げ込まなければならない。

「労働生産物の価値関係」：わかりやすくは値段のこと。例えば、紅茶なら飲んで「おいしいというその中にある性質」ではなく、人間と人間の関係のことである。例えば、紅茶をくっている人と時計をつくっている人との関係が、物と物との関係として現れてくると言っている。

（p.131）ここでは、人間の頭脳の産物が、それ自身生命を与えられて、相互のあいだでも人間とのあいあだでも関係を結ぶ自律的姿態のように見える。商品世界では人間の手の生産物がそう見える。これを私は、物神崇拝と名づけるが、それは、労働生産物が商品として生産されるやいなや労働生産物に付着し、したがって、商品生産に不可分のものである。

「宗教的世界の夢幻境」：人間が頭の中で神を考え、それは人間の脳髄の産物であり、それ自身が生命を与えられて、それが独立した形になっているように見える。ところが、神を考え出し、それを独立の物としているのは、実は人間と人間の関係が、神という形をとって現れて来るということである。苦しみや悩みにたいし、なにかにすがりたい。こうした思いが人間の頭の中に神を考える。これは人間同士の関係がそういう形をとり、それをみんなが拝んでいる。商品世界では、人間が生産物を「拝む」ので、マルクスはこれを物神崇拝と名づけて書いているのである。

〔経済ゼミナール〕商品経済は、人間の労働の社会的な性格を、労働生産物という物の性質として反映させ、総労働に対する生産者たちの社会的関係（=社会的分業のなかでの彼の地位）も、彼らの外部にある諸対象の社会的関係（=市場における商品と商品の関係）として反映させる。マルクスはこれを商品経済独特の“入れ替わり”と呼び、ここに商品形態の神秘性の根本があるとした。

（p.131）商品世界のこの物神的性格は、これまでの分析がすでに示したように、商品を生産する労働に固有な社会的性格から生じる。

（p.132）（社会的総労働の分岐）言い換えると、私的諸労働は、交換によって労働生産物が、そしてまた労働生産物を媒介として生産者たちが置かれた諸関連を通して、事実上はじめて社会的総労働の諸分岐として自己を発現する。

私的諸労働は労働生産物を媒介として社会的総労働の一部分になる。労働生産物を通しての社会的関係になる。すなわち、人と人との直接的な関係ではなく、物と物との社会的な関係として現れてくるということ。直接交換（物々交換）は、人と人との関係は目に見える。マーケットに持ち込むと、だれが買ってくれるかわからない。人と人との直接的な関係がなくなる。

「社会的総労働」：たがいに独立に営まれる私的諸労働の複合体。

「諸分岐」：一部分。

（p.132）労働生産物は。それらの交換の内部ではじめて、それらの互いに感性的に異なる使用対象性から分離された、社会的に同等な価値対象性を受け取る。

「何かの使い道」とは別に社会的に同等な価値対象性を受けとる。「何かに使える」ということではなく、価値対象、つまり交歓できる価値をもったものとして扱われるということ。

（p.132）有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂は…

分裂は、有用物が交換目当てに生産されるようになったとき、はじまる。中世のギルドは注文生産。客の寸法に合わせて洋服をつくるというやり方。職人と客は人間関係がある。交換が広がると直接的な人間関係が消え、交換目当てに生産が行われ、売るためにつくるということになる。

（p.132）（二重の社会的性格）この瞬間から、生産者たちの私的諸労働は、実際に、二重の社会的性格を受け取る。‥一面では一定の有用的労働として、一定の社会的欲求を満たさなければならず、そうすることによって、総労働の、自然発生的な社会的分業の体制の諸分岐として実証されなければならない。

ある人が洋服をつくるのは、社会全体として洋服が必要だから、個々人がその一部を担っている。つまり一定の有用的労働として社会的要求を満たしている。こうして社会的分業の一部分を担っている。しかし、もう一面では、他のものと交換される。物を売り、そのお金で別のものを買うことで生産者の要求も満たされる。この意味で二重の社会的な性格を受けとる。

（p.133）したがって、人間が彼らの労働生産物を価値として互いに関連させるのは、これらの物が彼らにとって一様な人間労働の単なる物的外皮として通用するからではない。逆である。…

これは私の労働の塊りです、だから買って下さいではない。それは、交換されることにより、その中に含まれている人間的労働が等しいのだということが分かってくる。つまり、人間的労働がこもっているものなのだが、それが交換されなければ人間的労働がこもっていると言ことがわからないという。

〔David Harvey〕問題はこうである。（p.131）「商品形態やそれを表現している諸労働生産物の価値関係は、労働生産物の物理的な性質やそこから生ずる物的な関係とは絶対に何の関係もない」。使用価値としての商品のわれわれの感覚的経験は、その価値とはまったく関係ない。それゆえ、商品は、（p.131）「感性的でありながら超感性的な物または社会的な物」である。その結果、（p.131）「ここで人間にとって物と物との関係という幻影的な形態をとるものは、ただ人間自身の特定の社会的関係でしかない」。そしてこの条件こそ、（p.131）「労働生産物が商品として生産されるやいなや労働生産物に付着する物神性」を規定するのである。この物神性は（p.131）「商品生産と不可分」なのである。彼が言うところでは、そうなるのは（p.131）「生産者たちが自分たちの労働生産物の交換をつうじてはじめて社会的に接触するようになる」からである。だから、生産者は市場交換という行為の中で初めて（p.131）「彼らの私的諸労働の独自な社会的性格」を知る。言い換えると、彼らは自分の商品を市場にもちこんで交換を成功させるまでは、自分の商品の価値を知らないし、知ることができない。（p.132）「それだから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸行動の社会的性格は、あるがままのものとして現れるのである」－あるがままに現れるというフレーズに注意－（p.132）「すなわち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではなく、むしろ人と人との物的諸関係および物と物との社会的諸関係として現れるのである」

（p.133）だから、価値の額にそれがなんであるかが書かれているわけではない。

「この物に価値がある」ということが、別にこの物の中に書いてあるわけではなくて、実際にそれが社会的に交換されることによって、はじめてそれが価値あるものだということが分かってくる。

（p.133）（価値は象形文字のようなもの）むしろ、価値が、どの労働生産物をも一種の社会的象形文字に転化するのである。あとになって、人間は、この象形文字の意味を解読して彼ら自身の社会的産物――秘密の真相を知ろうとする。

「象形文字」：絵文字と字の中間くらいの字のこと。ここでは意味の分からないものということ。後になって、人間は自分たちがつくったものがなぜ交換されるかということを知ろうとするという意味。

（p.133）労働生産物は、それが価値である限り、その生産に支出された人間的労働の単なる物的表現にすぎないという後代の科学的発見は…労働の社会的性格の対象的外観を決して払いのけはしない。

労働生産物は人間の労働の塊りだ。こういう物として現れてくるのだということを発見したのは、後代の科学的発見である。労働価値説であるが、労働の社会的性格とは、世の中の必要なものを支えて、それが交換されるということである。それが商品という形をとって現れる。それがなぜかという秘密が解明されても、しかし商品という形で現れることは依然としておなじである。つまり「対象的外観を払いのけはしない」ということ。

（p.133）商品生産というこの特殊的生産形態にだけにあてはまること、すなわち、互いに独立した私的諸労働の独特な社会的性格は、人間的労働としてのそれらに同等性にあり、かつ、この社会的性格が労働生産物の価値性格という形態をとるのだということが、

意味は、同上である。

（p.134）（交換の中で社会的性格が現れる）生産物の交換者たちがさしあたり実際に関心をもつのは、自分の生産物と引き換えにどれだけの他人の生産物が手にはいるか、すなわち‥この割合が一定の慣習的な固定性にまで成熟すると、この割合はあたかも労働生産物の本性から生じるように見える。

マーケットにおいていくらで売れるかが一番の関心事である。１缶の紅茶は110円であるが、それは紅茶が商品となり、他の物と交換されるものとなった時、価値をもつにいたるのである。そして価値は、社会関係を表すものであり、その大きさはその商品を生産するための社会的、平均的労働時間の大きさで決まる。しかもその貨幣表現である値段は、さらに価値を中心に、需給関係で絶えず変動する。したがって、1缶の紅茶は、つねに110円とは限らない。そしてこの値段の変動は、（交換者たちが‥）

（p.135）（生産者が支配される）この運動を制御するのではなく、この運動によって制御される。

値段の上り下がりは、生産者の方ではどうにもできない。生産者の方が物のつくり方を変えなければならない立場にある。こうした仕方を「互いに独立に」行っているが、その交換比率は偶然に動いている。

（p.135）社会的に必要な労働時間が――規則的な自然法則として強力的なに自己を貫徹するからである。

物の値段、交換の比率は生産者の方ではどうすることもできず、生産者の方がそれに合わせなければならない。物をつくるのに、もっと長い時間がかかったと言っても許されない。社会的に必要労働時間にしばられるということ。商品生産が発展することにより、価格あるいは価値の方が逆に生産者をしばるようになってくるということ。

「現実の発展」：商品生産が広がること。分析はあとから始まるといっている。

（p.135）（分析はあとから）人間の生活の諸形態についての省察は、したがってそれらの科学的な分析もまた、一般に、現実の発展とは反対の道をたどる。それは〝あとから〟始まり‥。これらの形態の歴史的性格についてではなく―これらの形態は人々にはむしろすでに不変のものと考えられている。

商品生産がある一定の歴史的段階で現れるものではなく、いつでもある物としてそれを前提として分析がはじまる。商品生産ではない世の中があるなんてことは考えなかった。そしてその商品生産の社会で、商品生産の中心にあるのはお金ですが、そういうものが人間と人間の関係を覆い隠してしまうのである。

（p.136）‥諸商品の価値性格の確定に導いたのは、諸商品の共通な貨幣表現にほかならなった。ところが、商品世界のまさにこの完成形態が―貨幣形態―こそは、私的諸労働の社会生活を、あらわに示さず、かえって、物的におおい隠すのである。

お金によって物の値打ちがはかられるという世の中をみんなが当たり前のこととして考えるようになる。貨幣というものの中で、人間と人間の関係が隠されてしまうのである。

（p.136）それらは、商品生産というこの歴史的に規定された社会的生産様式の生産関係にたいする、社会的に妥当な、したがって客観的な思考形態なのである。

物神性の分析は2段階を通じて進行する。**その②****、**物紳性が古典派経済学において、どのように誤って表現されているかの考察である。

（p.137）（ロビンソン物語）経済学はロビンソン物語を好むから、まず孤島のロビンソンに登場ねがおう。

商品生産が行われていない社会を考えてみると商品と貨幣の物神性がはっきりとわかるようになる。マルクスは4つの社会をとりあげる。

　貨幣により、人間と人間の関係がおおいい隠される。この貨幣形態を分析したのが、ブルジョア経済学である。

ロビンソン・クルーソー物語－船が難破し、１人、ロビンソンが孤島に漂着する。日記をつけ、家計簿 （お金ではなく、労働時間）をつけ、合理的に生活をした。ロビンソ・クルーソーは自給自足。種々の生産物を生産する。そのための自分の時間を種々の機能のあいだに正確に配分する。配分の基準は生産物1単位当たりに必要な労働時間である。この時の生産物は商品ではない。この労働時間は生産物の価値という形態をとらない。少しの神秘性もない。

（p.138）（暗いヨーロッパの中世）暗いヨーロッパの中世に目を移そう。…農奴と領主と、臣下と君主と、俗人と聖職者。人格的依存が、物質的生産の社会的諸関係をも、その上に立つ生活領域をも性格づけている。

…社会的基礎をなしているからこそ、労働も生産物もそれらの現実性とは異なる幻想的姿態をとる必要はない。

…僧侶たちに納めるべき10分の1税は、僧侶の祝福よりもはっきりしている。

中世の社会では、人と人との関係が表に出てくる。領主と農奴の関係は、生産物の一定割合を納めること。これは商品交換ではない。処罰をともなう力関係で決まっていた。人格的な隷属関係であって商品関係ではなかった。

教会に1/10税を納めなければならないが、それは自分のためにどれだけお祈りしてくれるかどうかに関係なかった。

隷属関係は人と人との関係で、物と物との関係ではない。

（p.139）（氏族社会）…これらの生産物を生み出すさまざまな労働、農耕労働、牧畜労働、紡績労働、織布労働、裁縫労働などは、その自然形態のままで、社会的機能をましている。

家父長的な共同体＝氏族社会。氏族の長が構成員に仕事の役割分担を決めている。労働の生産物を氏族の長に納めるのです。構成員は生産物を売ることはできない。

（p.140）（社会主義社会）最後に、目先を変えるために、共同的生活手段で労働し、自分たちの多くの個人的労働力を自発的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体を考えてみよう。

…この連合体の総生産物は一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は、ふたたび生産手段として役立つ。

…彼の労働時間によって規定される物と前提しょう。そうすると、労働時間は二重の役割を果たすことになるだろう。…人々が彼らの労働および労働生産物にたいしてもつ社会的諸関連は、ここでは、生産においても分配においても、簡単明瞭である。

マルクスが考えた社会主義－「共同的生活手段で労働し、自分たちの多くの個人的労働力を自発的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体」マルクスは、社会主義の青写真をあまり書いていない。「自由な人々の連合体」とは、個人ではなく社会全体で労働の割り振りを考える。生産手段の私有制がなくなって、社会的所有となる。

「労働時間の二重の役割」：①その社会にとって必要な物をどれだけつくるのかという目安となる。②生産物を個々の生産者に配分するための分配の目安となる。

（p.141）（キリスト教と資本主義）この物的形態において彼らの私的諸労働を同等な人間労働として互いに関連させることがあるが、このような商品生産者たちの社会にとっては、抽象的人間を礼拝するキリスト教、ことにそのブルジョア的発展であるプロテスタント、理神的などとしてのキリスト教がもっともふさわしい宗教形態である。

カソリック－飾り立てて物を拝む傾向がある。十字架やイエス像など。

プロテスタント－自分の心の中にある神を思い浮かべて拝む。「心の中の神」という抽象性をもつようになるのは、ブルジョア社会、商品生産の社会に一番ふさわしいのは、身分の違いを超えて人間がすべて平等に考えられているような社会ということのによる。

（p.141）古アジア的、古代的等々の生産様式においては、生産物の商品への転化、したがってまた商品生産者としての人間の定住は、一つの副次的な役割を、―といっても、共同体が崩壊段階にはいっていけばいくほど、ますます重要な役割を―演じている。

（p.142）（古代の宗教）自然的な類的関係の臍帯（さい帯）からまだ切り離されて個々人の未成熟にもとづいているか、さもなければ、直接的な支配・隷属関係にもとづいている。

…この現実の狭隘さが古代の自然宗教や民族宗教に観念的に反映している。

「自然的な類的連関の臍帯から…」：人々が個人として自立していない人間関係の上に物の生産、あるいは分業が成り立っている。横溢さが民族宗教や自然宗教に反映している。すなわち、キリスト教は世界宗教でどの民族も加わることができる。古代宗教の代表はユダヤ教。ユダヤ教は「ユダヤ民族は神によって選ばれた特別の民族」という教えであり、割礼の儀式がある。儀式に参加したものだけがこの宗教に参加する。

　イスラム教にも同じような考えがある。「片手にコーラン、片手に剣」民族的な狭さを支えているのが古代の宗教だとマルクスは言っている。

（p.142）（神秘のブェールを脱ぎ捨てる）けれども、そのためには、社会の物質的基礎が、あるいは、それ自身がまた長く、苦難に満ちた発展の自然発生的産物である一連の物資的存在条件が、必要とされる。

「現実的世界の宗教的反射」：商品生産が発展してくる（現実）のもとでは、誰彼の差別なしに、「神を信ずる者はすべてわがもとに来たれ」となると現実を反射することになると言っている。商品生産社会が意識的計画的管理下に置かれるとときには、商品の神秘性はなくなる。

マルクスは狭い民族的な宗教から、キリスト教的な非常に抽象的な人類一般の世界宗教になって－それが商品生産社会にふさわしい－さらに、意識的計画的管理のもとに置かれると、商品の物神性、神秘性もなくなるから宗教もなくなると言いたかった。

「長い苦難に満ちた…」：社会主義、共産主義社会が実現されるためには、社会の生産力の発展が必要だと言っている。

（p.143）（古典派経済学の限界）ところで、確かに経済学は、不完全にではあるけれども、価値と価値の大きさを分析して、この形態のうちに隠されている内容を発見した。しかし、経済学は、では、なぜこの内容があの形態をとるのか、したがって、なぜ労働が価値に、またその継続時間による労働の測定が労働生産物の価値の大きさに表わされるのか？という問題を提起したことさえなかった。生産過程が人間を支配していて、人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体に属しているということが、その額に書かれている諸定式は、経済学のブルジョア的意識にとっては、生産的労働そのものがそうであるのと同じくらい自明な自然的必然性である。

（古典派経済学の）アダムスミスやリカードヴは価値をつくり出すのは労働だというところまでは発見した。これは労働価値説である。だが、「この内容」一労働の価値である。「あの内容」－商品交換というかたちはわからなかった。さらに、貨幣が生まれてくるのか、もわからなかった。なぜ、労働が価値に、また、その継続時間による労働の測定が労働生産物の価値の大きさに現れるのたがわからなかった。すなわち価値形態論がなかったのである。

「認定式」：「人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体」とは資本主義のことである。資本主義では、物の値段の決まり方にしても、生産の分配にしても個人を超えた自然法則的なものによって決まる。人間は、こうした生産過程をコントロールできず、逆に生産過程によって人間がコントロールされている。経済の法則（恐慌による失業、値崩れで売れず破産）によって人間が支配されている。

「自明な自然的必然性」：資本主義社会で生活しているものにとっては、資本主義以外は考えられない。自然的必然性とは、みんな思い込んでいるということ。資本主義は変わりようがないとブルジョア経済学は考えている。

（p.143）（歴史は資本主義でとまった）それだから、経済学が社会的生産有機体の前ブルジョア的形態を取り扱うやり方は、教父たちが前キリスト教的諸宗教を取り扱うやり方と同じなのである。

今までの宗教は完全に間違っている。自分たちが正しくて、これ以上正しい宗教は出てないと考えているのと同じである。ブルジョア経済学者も同じで自分たちは永久不変と考えているのである。

（p.148）（自然は価値をつくらない）とりわけ、交換価値の形成における自然の役割についての退屈でばかばかしい論争が示している。

　物の価値を考えるとき、その物の中に入っている材料、自然の素材、つまり材料費は当然入っている。

生産の3要素－土地、資本、労働－土地は自然のことであるが、土地が生産の上では一定の役割を果たすことになっている。これは、使用価値からみればその通り。交換価値からみれば、それは労働がつくり出すものだから自然素材を含むことはありえない。海で魚をとる。釣る場合、労働が投下されるので交換価値は生ずるが、海にいる魚自体は自然があたえたものだから、交換価値の中には入ってこないということ。

重金主義：金や銀そのものが富である。アダムスミスは労働生産物が富といった。マルクスは拝金主義と冷笑した。

重農主義：地代は土地から生ずる。社会から生ずるのではないという考え方。ケネーは土地が地代を生むのは自然の恵みと考えた。

土地＝自然の恵みである。土地には労働を投下してつくり出す以上の物を付け加える力がある。この考え方でいくと農業以外は剰余価値を生まないことになる。農業以外は、原料に労働を加えて、その値段で物を売ると儲けは出てこないことになる。批判したのはアダムスミスである。アダムスミスは剰余価値という言葉は使わなかったけれど。農業以外にももうけが生じると主張した。

マルクスは、交換価値を考える場合、自然のお恵みはないのだ。交換価値は労働によって規定されるのであり、地代そのものは社会的関係の中で生じるとしている。

地代は『資本論』の最後の方で「地代は土地の私有があるから生じる」と言っている。

（p.149）（使用価値は商品そのものの中にはない）諸商品がものを言えるとすれば、こう言うであろう。われわれの使用価値を人間の関心を引くかもしれない。

…これまでまだどの化学者も、真珠やダイヤモンドのなかに交換価値を発見していない。

…物の使用価値は人間にとって交換なしに、したがって物と人間の直接的関係において実現される。

どれだけ使用価値があるか、ということは人間がこれをどうするかということ。酒好きには酒は使用価値があるが、嫌いな人には全く使用価値はない。使用価値はその中にあるのではなく、人間が必要としているかどうかで決まる。

使用価値は物として商品に属しているわけではない。属しているのは価値である。

「われわれ」：商品が言っている。価値というものは労働の塊りだ。それは「われわれ」に属している。しかし、交換という社会的な関係の中ですか、現れてこないと言っている。

経済学者が…どう伝えるか、…」：化学者は、成分を研究するが、売って儲けようとは考えない。だから交換価値を発見していない。経済学者はそういうものの中に価値を発見する。すなわち、「物の使用価値は人間にとって交換なしに、したがって物と人間の直接的関係において実現されるが、反対の物の価値はただの交換においてのみ、したがって一つの社会的過程においてのみ、実現される」のである。